



弟の涙

士官学校

春日信彦

士官学校

今、日本の政治は大きな方向転換を迎えていた。アメリカ軍国主義を根幹とした日本国防軍の強兵に政府は力を入れ始めていた。その第一段階として、教育制度の改革がなされた。少子化に伴う私立大学の削減。国立大学の定員削減。防衛大学におけるアメリカ人定員枠。国防軍の中堅幹部の育成を目的とした士官学校の新設。建設に当たっては、アメリカが軍事基地として重要視している九州の北部に当たる糸島市二丈に、政府は全寮制の士官学校の建設を計画した。300ヘクタールの敷地を有する軍事基地内に建設された糸島士官学校は、来年度開校に向けて、本年度から第一期生を募集する。

アメリカでは女性幹部の育成に成功し、女性の徴兵制度がスムーズに受け入れられた。日本においても、男女徴兵制度の実現に向けて、政府はCIAの主導の下に軍人教育の促進を図っていた。すでに、女性の徴兵制度を実施しているヨーロッパ数カ国においては、国民の軍国主義意識が高揚し、士官学校を卒業した優秀な女性軍人が第一線で活躍していた。体力的には男性には劣る女性ではあるが、愛国心と知能に優れた女性幹部は、男性幹部以上の成果を上げていた。

糸島士官学校は日本の未来を担う模範幹部軍人を育成することを目的としており、幹部に必要な軍人教育が5年間にわたって行われる。各クラス20名で、男子2クラス、女子1クラスからなる少数精鋭のエリート軍人教育がなされ、入学により一等兵の資格を得ることができ、卒業時には伍長の資格を持って卒業する。入学からの教育費は国費でまかなわれ、その上、月額約20万円の給与が支払われる。

入学に当たっては、厳しい選抜とともに政府からの名誉ある補助がなされる。入学試験は、書類選考の一次試験と二日間にわたっておこなわれる二次試験からなっている。競争倍率は非常に高く、男子は約50倍、女子は約30倍と狭き門で、一次試験で二倍までに絞られる。二次試験の初日では、午前中に作文とディベートがおこなわれ、午後からは面接がおこなわれる。二日目は、身体検査がおこなわれる。二次試験合格者には誓約書が家族宛に送られ、親権者と本人の承諾を持って入学が許可される。

士官学校は他の民間学校とまったく異なっている。入学式は国防軍への入隊式となっており、特別国家公務員である一等兵の資格が付与される。制服は学生用にデザインされたおしゃれな軍服で、許可された外出時においても軍服の着用が義務付けられている。入学と同時に生命保険と傷害保険に国費で加入する。毎月給与が支払われ、恩給の資格も付与される。問題なく卒業できた生徒は、伍長の資格が与えられ、さらに、家族は非常に安い家賃で官舎を借りることができる。

糸島士官学校第一期生募集は、北は北海道から南は沖縄まで全国적으로おこなわれた。軍事評論家は、なぜ、アメリカは糸島市を軍事拠点としたのか、この点を追求した。空軍に関しては、福岡空港に隣接している。海軍に関しては、佐世保港に隣接している。地理的な条件を考慮すれば、理にかなっているが、本当の理由は謎に包まれている。士官学校がそびえたつ広大な敷地には、当然、CIAの日本拠点が置かれていた。そのほかに、生物兵器研究所、医学研究所も併設されていた。

これらは、政府が公開した軍事白書から知りえる情報であるが、この敷地内におけるCIAの秘密にされている施設、活動は公開されていない。CIA主導の糸島軍事基地が今後どのように機能していくかは、日本政府も把握できない。名目上は、日米安保条約に基づく、日本防衛力の促進を目的とするアメリカ軍事支援とマスメディアは報道した。さらに、全国の中学校長宛に優秀な生徒を送り込むように総理大臣からの依頼がなされた。

士官学校に生徒を送り込んだ中学校には、日本国防軍を担う幹部育成に貢献した実績として、一人につき100万円の特別補助金が政府から送られた。また、授業において、自由学習に国防論を取り入れた中学校は、模範中学校として全国から注目された。エリート主義を掲げる篠田教頭は、糸島中学から第一期生を送り込む策謀を立てていた。ターゲットにされた峰岸は、書類審査の一次試験を受験し、合格した。

この士官学校受験のことは、家族には黙っていた。まさか、合格するとは思っていなかったからだ。あくまでも、教頭の勧めで、断りきれず、受験したに過ぎなかった。この合格は、一気に全生徒に知れ渡った。職員室入り口横の広報掲示板に合格通知を貼り出し、さらに、担任の先生たちは峰岸の合格をホームルームの時間に知らせた。峰岸は全生徒の注目の的となってしまった。教頭は二次試験も合格したかのように笑顔ではしゃぎまわっていた。

峰岸はこれからどうしていいかわからなくなっていた。峰岸は教頭に言われるままに受験したものの、合格を喜んでいいものか悩んでいた。確かに、もし二次試験も合格すれば、特別国家公務員として給料がもらえ、将来は幹部としての役職が約束される。だが、父親は軍人になることを認めてくれるか不安であった。峰岸も、自分が軍人としてやっていけるか、まったく自信が無かった。

書類審査では、成績、部活、授業態度、賞罰、家庭環境などが審査された。峰岸は剣道部に所属していたが、県大会でベスト8に2年のときに入った程度で、特別他の生徒に比べて秀でているところは無かった。成績も、平均3.7で特に優秀なほうではなかった。ただ、2年のときに“家族”というテーマの中学生弁論大会で優秀賞を受賞したことが唯一の自慢であった。峰岸は、なぜ、高倍率の超難関校に自分が合格したのか、信じられなかった。何かの、間違いではないかとさえ思ったりもした。

6月25日(火)、帰宅した峰岸は、すぐに夕食の準備に取りかかった。三年前に母親をなくしてからは、家事のほとんどをやっていた。弟二人と食事を済ますと二階の自室に駆け上がった。峰岸は小学校のころから日記をつけていた。宿題がどんなにたくさんあっても、日記を欠かしたことは無かった。日記には、家族のこと友達のことを事細かく書いた。日記を書いているときが一番楽しかった。学校でどんなに嫌なことがあっても、日記に書いてしまうと気分がすっきりした。日記帳にペンを走らせ始めると三島のこと頭がいっぱいになった。

今日は、初めての出来事があった。三島から話しかけられたことだった。試験前は部活が無い
ため、早く帰って試験勉強をする予定だったが、校門を出たところで三島に声をかけられた。三
島を含む男女数人で帰宅したことはあったが、三島と二人きりで帰宅したことは無かった。小学
校のときから糸島練成館と一緒に稽古していたが、なぜか二人だけで帰宅したことは無かった。

峰岸は南部地区大会の試合についての話を持ちかけてくると思ったが、意外にも峰岸の士官学校
一次合格の話であった。三島は峰岸の軍人志望がどうしても納得がいかなかったのだ。二人は並
んでしばらく歩いていたが、三島が小さな声で口火を切った。「峰岸、お前、軍人になりたい
のか？」三島は少し照れくさそうに話しかけた。峰岸はしばらく返事をしなかった。この件に関
しては家族にも話していないことであり、士官学校に合格したことに戸惑っていたからだ。

士官学校は教頭の勧めで受験したものであり、合格するとは夢にも思っていなかった。今でも合格したことが信じられないでいた。峰岸は、なぜ教頭が士官学校の受験を勧めたのか改めて考え始めていた。勧められた当初は、そのことに関してはまったく考えても見なかった。というのも、まったく合格するはずが無いと思い込んでいたのと、合格すれば、特別国家公務員として給料がもらえ、幹部としてのすばらしい未来が待っていると、教頭が熱弁したからだった。

教頭から合格の通知を受けたときは、頭が真っ白になってしまった。合格という現実が峰岸の心に重くのしかかってきた。8月に二次試験を受験することになるが、もし、二次試験に合格すれば、軍人にならなければならないのだ。峰岸は、軍人になりたいと思ったことは一度も無く、士官学校に通いたいと思ったことも無かった。晴天の霹靂とはこのようなことを言うのだと、ことわざの意味を心から理解した。

教頭が士官学校を勧めた理由には、特に心あたりは無かったが、もしかしたら、弁論大会で話した将来の夢が原因ではないかと秘かに思った。あのとき、「将来、定時制に通いながら、修行を積んで、父のような大工になるのが夢です」と話した。さらに、家族の経済的現状と父親の怪我のことも話した。家庭の経済的理由で働くことを余儀なくされている峰岸を思い、士官学校を勧めたのではないかと推察した。

峰岸の頭は混乱していた。教頭の話が本当であれば、特別国家公務員として約20万円もの給料がもらえる。軍人になるための試練を耐え抜けば、弟たちを進学させることができる。弟たちは、今は小学生だから進学のことを考えていないが、きっと、家庭が貧しければ進学をあきらめるに違いないと思えた。エリートになれる二度とないチャンスを逃すことは無いのではないかと、弟たちのためにも軍人になるべきではないかとささやくもう一人の自分がいた。

峰岸は軍人になりたいと思ったことも無ければ、軍人になることがどういうことかも考えたことが無かった。教頭は、お金がもらえて、将来、国防軍のエリートになれると言ったに過ぎなかった。ただ、士官学校に入校すれば、軍人になるための厳しい軍隊生活を強いられることは想像できた。でも、お金のため、怪我に苦しむ父親のため、弟たちの進学のためなら、どんなにつらいことでも耐えられる気がした。

軍人になるということは、一体どういうことなのか、そのことを誰かに教えてほしかった。そんな時、三島は、核心を突いた質問をした。峰岸は不安な気持ち、混乱した気持ちを三島にぶつきたい衝動に駆られたが、峰岸にはできなかった。士官学校は、教頭の勧めで何気なく受験したとは情けなくて言えなかった。混乱した心は、思いもかけない言葉を吐き出させた。「国を守るために軍人になりたいの」峰岸はどうしてこんなことを口にしたのか自分でも驚いた。

その言葉を聴いた三島は、黙ってうつむいてしまった。峰岸は、はっとした。三島を傷つけてしまったに違いないと即座に思った。峰岸が軍人になることに反対していることが、その態度でありありとわかった。峰岸は右手に持っていた学生カバンを三島のお腹に思いっきりぶつけた。ヲ〜と悲鳴を上げた三島は、目を丸くして峰岸を見つめた。「何するんだ、お前は何を考えているのか、さっぱり、わかんね〜よ。立派な軍人になればいいさ。きっと、お前なら、二次試験も合格するんじゃないか」三島は落ち込んだ自分を隠したかった。

三島は峰岸の立場をよくわかっていた。父親が怪我で思うように働けず、二人の弟の面倒を見なければならぬこと、峰岸は厳しい現状の中にいた。そのことを考えると、三島は、自分が思っていることを口にできなかった。三島は、戦争に反対であった。世界中から軍隊をなくすべきだと思っていた。将来、反戦運動のリーダーとして活動したいとも思っていた。特に、アメリカの核武装を憎んでいた。広島と長崎の原爆による悲惨な被災者のことを思うと、心が煮えたぎるほどアメリカが憎かった。

峰岸はこれ以上士官学校のことは話したくなかったが、三島の本心を知りたかった。「思うんだけど、士官学校って、イケメンがたくさん入ってくるじゃないかな～、楽しみなのよね～」峰岸は軍隊生活とはまったく関係ないことを話した。峰岸にとって、軍人になるということをどのように考えていいかわからなかった。当然、軍人になれば戦争に行かなければならない。戦場に行けば、敵を殺さなければならない。言い方を変えれば、殺人だ。そんなことを、現実にはやらなくてはならなくなる。

さっきまでは、軍人になれば給料がもらえて、国防軍のエリートになれて、日本の英雄になれると思っていた。だが、今、三島を前にすると、マシンガンを抱えて戦場に立っている自分の姿が目の前に現れた。軍人になるということは、殺人者になるということではかない。これが、現実だ。この現実には、まさに今、向かって歩いている。なぜ、引き返そうとしないのか？峰岸は自分に問いかけていた。

今すぐにでも、教頭のところに跳んで行って、はっきりと断るべきではないか。自分は軍人になんかには向いてないと言うべきではないか。峰岸は自分に何度も問いかけた。だが、それを引き止める醜い自分がいた。“今、ここで断れば、二人の弟の夢が消えてしまうぞ、それでいいのか。家族を見捨ててもいいのか。こんなチャンスは、二度と来ないんだぞ。給料がほしくないのか。エリートになりたくないのか。”こんなことを醜いもう一人の自分が、心の底でささやいた。

三島は、戦争も、軍隊も、原爆も、徴兵も、嫌っている。なのに、そのことをはっきりと言わない。峰岸には、合点がいかなかった。竹を割ったような性格の三島が、峰岸の気持ちを避けるように、とんちんかんなことを言っていた。峰岸は大声で三島に言ってほしかった。「軍人なんかに、なるな」その一言を、言ってほしかった。峰岸はじっと待っていた。もし、その一言を三島が言ってくれたならば、どんなに教頭に嫌われようとも、はっきりと、二次試験を断ることができると思った。

三島は、どうしても自分の気持ちを素直に言えなかった。峰岸に、戦場に行ってもほしくなかった。武器を手にしてほしくなかった。三島は、軍人はダメだ、とその一言がすぐそこまで出掛かっていたが、声になって出てこなかった。「士官学校に行っても、剣道は続けろよ」三島にとって、剣道は峰岸との出会いを作ってくれた赤い糸であった。士官学校に行ってしまうと、二度と会えないような気がした。氷のような不吉な予感が、心臓に突き刺さった。

三島は、依然として本心を言わなかった。三島の暗く落ち込んだ絶望したような顔を見たのは始めてであった。「三島、ばっかじゃないの、奇跡は、二度と起きっこないよ。二次試験は、見事に落ちて見せるよ、ワハハハ・・・」三島の思い込みに水をぶっ掛けた。深刻に思い込んだ三島を笑わせようとしたが、まったく表情を変えなかった。三島にとっては、一次合格が二人を遥かなたまで引き裂いていた。三島は話をする元気さえも失っていた。

三島は、自分の正義をあざ笑っていた。独りよがり、非現実的で、批判的で、妄想的な正義がいやになっていた。峰岸の現実的で犠牲的な決断を目の当たりにすると、自分がちっぽけで、偽善的な愚か者に思えていた。峰岸は軍人になんかになりたはずが無い。ただ、家族のために軍人になろうとしているに過ぎない。峰岸は、正義とか倫理とかで生きていくことができない現実の真っ只中にいる。峰岸は教科書のような生き方が、できないんだ。

肩を落とし、うつむいていた三島はすっと顔を持ち上げ話した。「俺って、剣道馬鹿で、幼稚だな。お前は、大人だもんな」言い終えると、急ぎ足で歩き始めた。峰岸は、急いで追いかけたが、三島は立ち止まらなかった。三島が踏み切りをわたり終えると、峰岸の前に遮断機が下りた。ガタン、ガタンと電車が通り過ぎた後には、三島の姿は無かった。峰岸の前には、数人の女子学生が歩いていたが、大きな声で叫んだ。「三島のバカ～～・・・」

いつものように、日記帳には、一日の出来事をこと細かく書き記したが、三島に関しては一言しかかけなかった。“三島のバカ、バカ、バカ”ノートをバシッと閉じるとベッドに飛び込んだ。しばらく天井を見つめていると、ドアをうるさく叩く音がした。「おい、美波、寝てるのか」だみ声の父、勲の声だった。「うるさいな～、起きてるわよ」美波は飛び起きてドアを開けた。

勲は腰と首を痛めてからは、大工を辞めガードマンをやっていた。明日の出発の時間を伝えるために、二階に駆け上がってきた。美波がドアを開けるや否や、勲は怒鳴るように言った。「明日は、4時に家を出る。飯はいらん」言い終えると背を向けた。即座に、美波は呼び止めた。「父ちゃん、話がある」勲は、初めて言われた言葉に目をむいて振り向いた。「なんや！小遣いは、もう無い、我慢せい」勲はお金のことを言われるのが、最もつらかった。

美波は、ほんの少し笑顔を作って、勲の背中を押しながら、階段を下りた。美波は勲をテーブルの席に着かせると、お茶を入れた。お茶を前にした勲は、美波の笑顔が気になっていた。「なんだ、話って」勲は進路についての話ではないかと直感した。近々、三者面談があるからだ。進路は美波の意志に任せることにしていた。美波は定時制に通うとっている。このことについて、勲は賛成していた。だが、気が変わって、友達と一緒に私立に行きたいと言えば、喜んで賛成することにしていた。

美波は、少しためらっていた。黙って受験したことを叱られるんじゃないかと不安に思っていた。美波はお茶をすすっては、チラッと勲を見つめていた。勲はそのたびに、目をそらしていた。「父ちゃん、怒らんで、聞いてよ。うちね、父ちゃんに内緒で受験したと」勲は、一瞬、ドキッとしたが、今頃受験する学校なんかあるのだろうかと思訝に思った。勲は、日ごろ、美波にはつらい思いをさせていた。学校だけは、美波の好きなところに行かせたかった。勲は、笑顔を作って話を促した。

「どこば、受けたと？」勲はぶっきらぼうに訊ねた。美波は下を向いて小さな声で答えた。「士官学校、二丈にできた」美波もぶっきらぼうに答えた。勲は、思いもかけない学校名に目を大きくした。「今度できた国防省の士官学校か、超難関の学校たい。無鉄砲のお前らしかたい。チャレンジすることはいいことばい。落ちたからといって、嘆くことはなか。私立でも、公立でも、好きなところを受けてよか。元気出せ」勲は、士官学校に落ちたと思って励ました。

美波は、ますます言いにくくなってしまった。勲を見ては、うつむいて、また、小さな声で話し始めた。「一次試験がこの前あってな、書類審査なんやけど、この試験に、合格したと」美波は顔を持ち上げ、勲を見つめた。勲は、聞き間違いじゃないかと、自分の耳を疑ったが、確かに合格と聞こえたことに震えが来た。「合格！本当に、士官学校に合格したとか」勲は、信じられない顔で、再確認した。美波は、ゆっくりと答えた。「本当に、合格したと」美波は小さな笑顔を作った。

勲は突然立ち上がり、すべてを無視して、千代の仏壇の前に正座した。「千代、ありがとう。美波が、おれば、男にしてくれた」言い終えると、両手を顔の前に合わせ、しばらく拝んでいた。厳かに立ち上がると、緊張した勲は美波に向かった。美波はいったいこれから何が起きるのだろうか、びくついた。勲は、美波の右横までやってくると、笑顔を作って美波の両肩に手を置いた。「美波、よくしてくれた。お父さん、一生で、最高の喜びたい。美波、ありがとう」勲は涙を流していた。

波は、いったい、父親に何が起きたのだろうかと戸惑ってしまった。とにかく、怒られずに、喜んでくれたことで、ほっとした。「父ちゃん、そんなに、喜ばんで、まだ、二次試験があると。二次試験で落ちるかもしれんと。まだ、合格したっちなかと。早合点、せんどって」美波は、父親が勘違いしたと思った。勲は、大きく頷き、大きな声で話した。「今日は、前祝たい。千代にも報告した。ぱ〜と、やるばい」勲は、一次であれ、合格祝いをしたかった。千代が三年前に他界して、一つも家族には明るい話が無かった。とにかく、家族みんなで、わいわい、騒ぎたかった。

小学5年の将史がキッチンにやってきた。「うるさか～、父ちゃん、どうしたと。パチンコで勝ったとね」将史はご馳走に預けると思い、跳んでやってきた。「今日は、ぱ～と、やるばい。お前たちの食いたいもの、何でも食ってよか。直道も呼んでこい」それを聞いた将史は、跳んで直道を呼びに行った。勲はどしっと、いつもの席に腰掛けると、美波に指図した。「ビールとチーズもってこい。お前たちも、好きなもの、何でも取ってよか。気にせず、どんどん食え」勲の能天気はいつものことであったが、今日の能天気にはあきれた。

将史が駆け足でキッチンに駆け込んでくると、後に、金魚の糞のように小学2年の直道が駆けて入ってきた。「俺、すし、くいて～」将史が叫ぶと、「ぼく、ピザ、コーラ、チキンナゲット、ポテト」直道が叫んだ。美波は、金助に盛り合わせ5人前を注文し、ピザクックにピザ、チキンナゲット、から揚げ、コーラ、ポテト、お好み焼き、を注文した。将史と直道はテーブルを叩いて、はよくいて～、はよくいて～、とわめき始めた。

美波にいつものかんしゃくが起きた。「うるさ〜い！お前ら、静かにせんか」美波は、目を吊り上げていた。勲が大きな声で笑った。「美波、鬼のように怒るな。お前の合格祝いじゃないか。そうだ、靴がほしいと言ってたな。買っていいぞ」酒に弱い勲は、すでに酔っていた。「ね〜ちゃん、どこに、合格したとね。隠さんでもよかろうもん」将史は、美波の顔を覗き込んだ。間髪はさまず、勲が答えた。「ね〜ちゃんは、士官学校に合格したばい。すごいこっちゃん。美波は、えらかばい」勲は、笑顔で話し終えると、ゴクゴクと喉を鳴らしてビールを流し込んだ。

将史が、美波に向かって言った。「士官学校って、国立の学校やろ。すごか〜、見直したばい」将史は、右手を持ち上げ、敬礼した。直道もまねをして、敬礼した。美波は照れくさくなった。「そんなまね、やめんね、まだ、合格したっちゃんかと、父ちゃんの、早合点たい」美波の顔は真っ赤になっていた。玄関のチャイムの音が聞こえると、美波は玄関に跳んでかけて行った。

弟の涙

峰岸の心は毎日葛藤を続けていた。お金と名誉が手に入る二度とないチャンスを活かし、二次試験を受けるべきか、それとも、二次試験を断り、三島との剣道の道を選ぶべきか、毎日悩み続けていた。合格を知った父、勲の喜びは、美波をよりいっそう苦しめていた。もし、勲が士官学校入学に反対してしてくれたならば、どんなに気が楽だったろうとつくづく思っていた。決して、軍人になりたいとは思っていなかった。心の底では、二次試験に合格しないように祈っていた。

8月5日、6日には二次試験がおこなわれる。このことを考えると、夜も眠れなくなっていた。合格すれば、家族は喜ぶ、でも、きっと、三島との剣道の稽古は永遠にできなくなる。毎日のように心の底で、“合格しませんように”と祈り続けていたものの、一向に気分は晴れなかった。夏休みに入り、刻一刻と受験が近づくにつれて、胸が苦しくなるほど気分が落ち込み始めていた。いたたまれなくなった峰岸は、柏木に相談することにした。

7月29日、二人は例のマックで待ち合わせた。柏木は、電話で相談の内容を聞いて気が重くなかったが、峰岸のただならぬ心情を察し、相談に乗ることにした。柏木が、約束の10時にマックにやってくると、少しやつれた顔の峰岸は、いつもの窓際のテーブルで、ぼんやりと車の流れを眺めていた。柏木が、テーブルにカルピスを置き、ぼんと肩をたたいたが、返事もせず、魂が抜けたような峰岸は、ぼんやりと振り向き、気がふれたような表情をただけだった。

柏木は、峰岸の異変にびっくりした。「峰岸、大丈夫？困っているみたいだけど、考えすぎは身体に悪いよ」柏木は、このまま悩み続けると、病気になるのではないかと心配した。峰岸は、億劫そうに口を開いた。「人生、最大のピンチよ。頭がおかしくなってきた。どうにかしてよ」峰岸は神にお願いするように、両手を合わせた。電話である程度話を聞いていた柏木は、考えていたことを話し始めた。

「要は、規則だらけの士官学校に行くか、自由な学生生活ができる普通の学校に行くべきか、だったよね。あくまでも、私の意見だから、気を悪くしないでよ。私は軍隊のことはよくわからないのよ。だから、難しいんだけど、私としては、自由に学生生活をエンジョイしたいな～、縛られるのはいやだし。きっと、士官学校は、恋愛禁止だと思う。恋愛できない青春なんて、地獄じゃない。やっぱ、普通の高校に行って、恋愛したいよ。これが、私の意見です。どうかしら」柏木は、率直な意見を述べた。

峰岸は、じっと柏木の話に聞き入っていた。「そうか～、恋愛よね。確かに、恋愛禁止だよね。士官学校といっても軍隊だもの。規則も多いだろうし、外出もできないだろうな～、模範軍人になるために、毎日鍛えられるってことか。考えるだけで、頭が痛くなってきた。やっぱ、軍人になるの、やめようかな～、でもね～、一次試験に合格しちゃたもんね、いまさら、後には引けないし。どうして、合格したんだろう」峰岸は一次試験に合格したことが、恨めしかった。

柏木ははっきりした意見は言えなかったが、話を続けた。「合格したということは幸運なことじゃない。とにかく二次試験は受けるべきよ。合格すれば、軍隊生活はつらいと思うけど、未来が開けるじゃない。日本を守る仕事じゃない。頑張れば。ただし、恋愛は、我慢することになるわね」柏木は、励ましたが、峰岸は笑顔を見せなかった。峰岸は、ぼんやりと三島のことを考えていた。「そうね、恋愛は、無理か」峰岸は、がっかりしたように、沈んだ声でポツリとささやいた。

柏木は、突然笑顔を作り話し始めた。「そう、渡辺が、夏休みで帰ってきているのよ。昨日、うちに遊びに来てね、寮でのいやなことを散々聞かされたよ。やっぱ、寮生活って、苦勞が多いみたいね。でも、三島の今度の試合のことを話したら、急に、笑顔を作って嬉しそうだったよ。今でも、三島のこと好きみたいよ。日曜日の試合は応援に行くって言ってた。私もいくけど、峰岸、今度こそ、九州大会に行つてよ」柏木は、峰岸の最後の試合を応援した。

ぼんやりしていた峰岸は、急に真剣な顔になって、話し始めた。「渡辺が三島のことをね～、やっぱ、好きだったのか」峰岸は、水っぽくなったコーラを一気に飲んだ。柏木は話を戻した。「峰岸の根性だったら、何でもやれるさ。軍隊生活だって、耐えられるよ。思うけど、二次試験は絶対合格すると思う。間違いないよ」柏木は、士官学校の受験は教頭の策謀と考えていた。

峰岸は、絶対という言葉が気にかかった。「絶対！どうしてそんなことがいえるのさ。一次試験合格は、まぐれというか、奇跡というか、なんと言うか、今でも信じられないけど、二次試験まで、奇跡が起きるとは思えないんだけど。絶対って、なにを根拠に言うのさ。わけのわからない励ましは、いやよ。どういうことか言ってよ」峰岸は、柏木に食って掛かった。柏木は、まったく動ぜず、笑顔を作って答えた。

「あくまでも、私の憶測なんだけど、気を悪くしないでよ。ほら、渡辺の転校のことなんだけど、あれは、教頭が知り合いを通じてやったことだと思う。それと、大島先輩の名門校合格も教頭が仕組んだことだと思うの。きっと、教頭は、いろんな人脈を持っていて、コネが効くのよ。峰岸の合格も、教頭の筋書きだと思うのよ。だから、必ず、二次試験も合格すると確信したのよ。これは、あくまでも、憶測だから、気にしないでよ」柏木は、平然と、峰岸を傷つけるようなことを言った。

峰岸は、一瞬地獄に突き落とされたような気がしたが、柏木が合格の謎を解いたように思った。「そうか、そうよね、誰が考えても、へんよね。柏木の言っていることが真実かも。となれば、必ず、合格するってことか。ようは、学校の名誉のために、利用されたってことだな。それはそれでいいかもね。親父は、喜んでいることだし」悩んでいた自分が、ばかばかしくなった。

峰岸は、目を大きくして、柏木を驚かせてみた。「もしもよ、面接で、アメリカの悪口を言ったら、不合格になるんじゃない」峰岸は、冗談を言った。柏木は、本心と思い、落ち着くように説得し始めた。「峰岸、行きたくないのはわかるけど、それだけはやめときな。もし、そのことが、教頭の耳にでも入ったならば、一生教頭に恨まれるぞ。殺されるかもしれないぞ、教頭は鬼だから」柏木の声は上ずっていた。

峰岸は、ワハハと大きな声で笑うと、冗談を続けた。「それは面白じゃない。安保条約をどう思うかと聞かれたら、日本を馬鹿にした、アンポンタン条約って言ってやるか。面接官、どんな顔するだろうね、それでも、合格したら、教頭力は相当なものということになるよね。面接が楽しみになってきた、こうなったら、破れかぶれだ」峰岸は、渡辺のことを聞いて、ムカついていた。

真に受けた柏木は、手が震え始めた。「峰岸、馬鹿なことをしちゃ、だめよ。本当に、ダメだから。たとえ、教頭の仕組んだことであっても、合格すれば、得するのは、峰岸なんだから。一生に一度の、ラッキーカードをみすみす捨てることはないわ。落ち着いて、峰岸。お父さんをごっかりさせることだけは、やっちゃダメ。わかった」柏木の顔は青くなっていた。

峰岸は、青くなった柏木を見て、少しムカつきが治まった。「まあ、柏木がそこまで言うのなら、アメリカをよいしょするか、合格する面接を受けるのもバカみただけど」峰岸は、軍人になる決意をした。そのとき、遠くに消えていく三島の姿が、脳裏に現れた。それを聞いた柏木は、ほっとした顔で応えた。「よかった、それでいいのよ。家族のためにも、教頭のためにも、日本のためにも、それがいいことだよ。峰岸、頑張れ」柏木は、自分で何を言っているかわからないくらい、頭に血が上っていた。

悩みが解決したわけではなかったが、峰岸の心は幾分すっきりした。とにかく、弟たちのために二次試験を受けることにした。柏木にお礼を言って分かれた峰岸は、すぐに家に帰って、弟たちの宿題を見ることにした。弟たちの部屋をのぞくと、プレステでゲームをやっていた。「二人とも、宿題やったのか、ね～ちゃんが見てやる、さっさと、夏休みの友、だしな」峰岸は、毎年、二人の宿題を手伝っていた。二人は、まったく、進んでやらないからだ。

二人は怒鳴られても、一向に、ゲームをやめなかった。「ね～ちゃんが、お前らの面倒見るのは、これが最後だからな、わかってんのか」二人は、無言で息を合わせたように振り向いた。「え～、それって、どういうこと？」将史が訊ねた。「来年から、士官学校に行くって言っただろ。士官学校は、全寮制なんだ、だから、来年からは、お前ら、自分で宿題をやらなくっちゃならないんだ。わかったか」美波は、合格した場合の話をした。

二人は、まだ言われていることが、わかっていないような表情でぽかんとしていた。「ね～ちゃん、家を出て行くのか、そんなこと言ってなかったじゃないか。うそつき。ね～ちゃんのバカ」将史は、怒りをぶちまけた。直道は今にも泣きそうな顔で、訴えた。「一緒に行く、僕も、一緒に行く」直道は、泣き始めた。直道は立ち上がり、その場で駆け足をするように、両足をどたばたさせ始めた。「いやだ、いやだ、ね～ちゃん行っちゃ、いやだ」直道の叫び声は、鼓膜を突き破るほど大きくなっていた。

波は、まったく予想していなかった事態に直面し、おろおろするばかりであった。「わかった、ね～ちゃん、どこにも行かない。だから、おとなしくして」美波は、直道を抱きしめた。直道は鼻をすすり、しゃくり声を出していたが、美波の手をしっかりと握ってゆっくりと話し始めた。「約束だからね、絶対嘘ついちゃダメだからね。うそつたら、僕、死んじゃうから」直道は、つめが皮膚に突き刺さるほど美波の手を強く握っていた。美波の目から、涙が止めどもなくこぼれていた。「ごめんね、ね～ちゃんがバカだった」美波は直道と将史を思いっきり抱きしめた。

決断

8月1日、峰岸は、間近に迫った二次試験のことで、教頭に呼ばれていた。峰岸は、静かに校長室のドアをノックした。「お入りなさい」命令口調の教頭の声が峰岸の耳に突き刺さった。峰岸は、そっとドアを開け、中に入っていくと、校長と教頭が笑顔で迎えた。「峰岸、遠慮せずはこちらにお座りなさい」教頭は、向かいのソファに手招きした。峰岸がお辞儀して腰掛けると、校長が声をかけた。「よかったね。合格おめでとう。二次試験は、形式的なものだ。安心して、受験するがいい」校長は、合格は当然のように話した。

教頭は、落ち着いた声でやさしく話し始めた。「いまさら、言うことじゃないと思うけど、最も合否を決めるのは、面接よ。わかっていると思うけど、アメリカと政府を非難するような発言は、絶対しないように、とにかく、どんな質問にも、従う姿勢を見せなさい。たとえば、“いかなることがあっても、軍の命令に従いますか”、と質問されたら、素直に、従いますと答えなさい。ポイントはそれだけです」教頭は、笑顔を作って峰岸の肩にそっと手を置いた。

峰岸の気持ちは決まっていたが、教頭に逆らう態度は見せず、大きく頷いた。教頭は安心した表情で、話を続けた。「士官学校は、軍事基地にある一つの施設なの。あそこのエリアには、学校のほかに、研究所や日本CIA支局があるのよ。運営の指揮は、CIAがほとんど握っているの。だから、合否もCIAの判断ってわけね。こんなことは、余談だったわね。峰岸が合格すれば、糸島中学は、全国的に有名になるわ。もう、わくわくしちゃうわ。峰岸は、一躍、英雄よ。頑張って」教頭は、一人で舞い上がっていた。

8月5日、9時30分から、二次試験が開始された。午前中に、作文とディベートがおこなわれた。作文のテーマは、“女性の徴兵制についてどう考えるか”であった。ディベートは、“核保有は国防に有利か、不利か”であった。峰岸は、有利のグループのメンバーとして意見を述べた。午後は、個別面接がおこなわれた。面接官は、3人で、そのうちの一人は日本CIAであった。

面接内容は、以外にも、一般的で、中学生生活に関するものであった。中学で思い出に残ったこと、部活で得たこと、将来の夢、など学生にふさわしい質問であった。だが、最後に、可否にかかわる決定的な質問がなされた。CIAの面接官が、流暢な日本語で質問した。「あなたは、お国のために死ぬことができますか？」面接官はじっと峰岸の目を見つめた。峰岸は、しばらく黙っていた。面接官たちは、怪訝な顔を始めた。

峰岸は、勇気を振り絞って、答えた。「私は家族を守るために軍人になりたいと思っていますが、お国のためではありません。だから、お国のために死ぬことはできません」峰岸は、きっぱりと答えた。峰岸の心はすっきりした。弟の涙を裏切ることだけはできなかった。面接官は、峰岸のりりしい態度には感心していた。その日は、寮で一泊し、翌日身体検査がおこなわれた。

8月27日、校長宛に合否が通知された。峰岸は、不合格であった。教頭は、悲壮な顔で校長と話していた。「信じられない、あれほど、うまくいっていたのに、あ～～、校長、申し訳ございません」教頭は校長に頭を下げていた。校長室に呼ばれた峰岸は、教頭の手前、何度も頭を下げて、うその涙を流していた。「峰岸、もういいわ、合否の判断はC I Aだから、どうしようもないわ。もう、お帰りなさい」教頭は、峰岸の気持ちを考え、優しい言葉をかけた。

今日、合否発表があることを知らされていた勲は、早めに帰宅した。勲が帰宅した玄関の音を聞きつけると、美波はゆっくりと階段を下りてきた。「お帰り」美波は、緊張していた。「ただいま」勲は、服を着替えるとキッチンにやってきた。美波は、テーブルに缶ビール、コップ、チーズを用意して待っていた。勲は、椅子に腰掛け、声をかけた。「おい、どうだった」勲は、結果を訊ねた。美波は、しばらく間をおいて、答えた。「ダメだった、ごめん」美波は、頭を下げた。

勲は、コップにビールを注ぎ、笑顔で一口飲んだ。「そうか、まあ、これも運命だ」勲は、なぜかがっかりしなかった。美波は、いやみを言われるかと心配していたが、予想に反して機嫌のいい勲が、奇妙に思えた。勲は、もう一口飲むと、付け加えた。「自分のやりたいことをやればいい、家族のことは心配するな」勲は、目を閉じてしばらく黙っていた。美波は、「わかった」と言って二階に上がった。

二階に上がった美波を確認すると、勲は仏壇の前に正座した。両手を合わせ、千代に話しかけた。勲の目からは涙がこぼれていた。「千代、美波は世界一、家族思いの娘たい、それに比べ、俺は、情けない男ばい」勲は、右手に拳骨を作り、思いっきり頭をゴツンと叩いた。勲は、「もし、ねーちゃんが家を出て行ったら、死ぬまでうらんでやる」と将史に言われていた。美波が弟たちのために不合格になるようにしたことを、勲は、わかっていた。

翌日、美波は朝練に出かけた。部室で着替え道場に出てみると、峰岸がやってくるのを待っていたかのように、三島が一人素振りをやっていた。三島に近づいた峰岸は声をかけた。「おい、話がある」三島は、素振りを続けながら答えた。「なんだ！」峰岸はしばらく間を置いて、答えた。「ダメだった」三島は、もう一度聞き返した。「何だって！」三島は、素振りの手を止めて、峰岸の顔を見つめた。

峰岸も三島の顔を見つめ答えた。「士官学校、不合格だった」突然、三島に笑顔が爆発した。「そうか、ダメだったか、お前は、軍人に向いていなかったということだ、剣道をやれってことだ」三島は、言い終えると、突然走り出した。三島はうれしかった。三島も峰岸と一緒に剣道をやりたかった。三島は峰岸が見ている前で何週も道場をぐるぐると走り続けた。そして、何度もつぶやいていた、峰岸は、やっば、かわい～、かわい～、かわい～

弟の涙

<http://p.booklog.jp/book/73627>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73627>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73627>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ